

講演会から

演題

スウェーデンの福祉施策から学ぶこと



講師 グスタフ・ストランデルさん

1974年スウェーデン生まれ。ストックホルム大卒業。スウェーデン福祉研究所所長、日本スウェーデン福祉研究所取締役を経て、2012年から現職。著書に「私たちの認知症」など。

で使いやすいものばかりだ。例えば薬入れは、タイマーによって決まった時間に1回分の薬が取り出せる仕掛けで、飲まないというアラームが鳴り、一人暮らしの高齢者でも忘れずに飲むことができる。音楽療法も盛んだ。認知症患者や障害者も演奏できるギターが開発され、誰でも音楽が楽しめる。楽器の演奏は、機能訓練になるだけでなく、脳の活性化を促す。

日常生活

以降、高齢者や障害者も普通の日常生活が送れるように支援するノーマライゼーションの理念の高まりとともに、劇的に変化していった。人格の尊厳や自己決定が重視されるようになったのだ。ポイントとは、スウェーデンが理念と考え方を変えたこと。それを持続してきた結果、現在のような福祉国家になった。

背負わされているイメージだ。確かに、スウェーデンの所得税は収入に応じて所得の30〜50%、消費税は25%である。だが、スウェーデン人は高負担だとは思っていない。税金は「預ける」もので、持続可能なシステムに税金を預けた結果、自分に必要なものが得られると考えている。

競争力

県障害者福祉協会設立20周年と県障害者社会参加推進センター設立25周年を記念した講演会がこのほど甲府市内で開かれ、千葉県で介護事業所を展開する「舞浜倶楽部」のグスタフ・ストランデル社長が「スウェーデンの福祉施策から学ぶこと」と題して講演した。

税金は「預ける」

持続可能な仕組みづくりを

日本に来て驚いたのは、スウェーデンが「福祉先進国」と言われていることだ。祖国を出るまで、教育、医療、介護にお金がかからな

い福祉社会が当たり前だと思っていた。

ムは住宅街の中にある。入所者はプライバシーが守られた個室で住み慣れた環境を再現し、以前と変わらな

い暮らしを続けていて、そこに地域の人たちがたくさん遊びに来る。ダンスが得意、友達と会え、悩みごと

また、福祉用具の開発も進んでいる。自立した生活の支援を目的に、シンプル

は、年金や税金、保険料が基本的に赤字にならないことだ。持続可能なシステムが確立している。税金は「払う」ものだと考えられて

雇用関係

スウェーデンの老人ホーム

相談もできる老人ホームは、地域の人たちにとって、楽しい場所なのだ。

時代は老人ホームが町はずれにあり、大部屋で、寝たきり、オムツ、褥瘡が当たり前。誰も入りたがらなかった。だが1960年代

は、年金や税金、保険料が基本的には赤字にならないことだ。持続可能なシステムが確立している。税金は「払う」ものだと考えられて

ある国家を実現しているのは、福祉国家の道を選び、守り続けているからにはかならない。

世界経済フォーラムの国際競争力ランキングでトップ10に入っている国は、スイス、スウェーデン、ドイツ、イギリスなど福祉国家である。

スウェーデンの 福祉施策を学ぶ

県障害者福祉協会

県障害者福祉協会（竹内正直理事長）は16日、ホテルクラウンパレス甲府で、設立20周年を記念して、スウェーデンの福祉施策について学ぶ講演会を開いた。写真。

講師は、同国出身で千葉県浦安市で有料老人ホームを経営するグスタフ・ストランドルさん。スウェーデンが危機的な人口減少と高齢化に直面し、福祉国家として発展した歴史を紹介。税金は高いが、教育、医療、介護にかかる費



用は無料で、「税金は『取られる』ではなく、預けるという意識。預けた分、得るものがある持続可能なシステムだ」と説明した。
また、飲み薬を管理できる

福祉用具などを取り入れ認知症高齢者の自立した生活を支える施策などを紹介。老人ホームではダンスや音楽が楽しみ「地域の人が遊びに来る場所になっている」と話した。

山日 H28.1.17

産

講演のため来県した、スウェーデンの介護方式を取り入れた高齢者施設を運営する
グスタフ・ストランドルさん

H28.2.2
山

「尊厳を守るケア」こそ大切



Gustav Strandellさん スウェーデン出身、千葉県浦安市在住。ストックホルム大卒。有料老人ホームを運営する「舞浜倶楽部」社長。41歳。

福祉国家として知られるスウェーデンの出身。母国と日本を行き来しながら高齢者福祉について研究し、千葉県浦安市で母国の介護方式を取り入れた高齢者施設を運営している。

剣道へのあこがれから、1992年に初来日。初めて自分の国を外から見るとき、「今まで普通だと思っていたことが普通でなかったことに気づいた」。スウェーデンでは、教育、医療、

介護にお金がかからない。その分、消費税25%、所得税30〜50%と負担割合が大きい。「日本では『税金を取られる』と言うが、税金は預けるもの。その分、得られるものがある持続可能なシステムだと思う」

スウェーデンが福祉国家に転換したのは「危機的な人口減少と高齢化に直面したから」。農業ができず、産業革命も遅れて貧しかったため、1930年ごろまでに人口の4分の1が米國に移住していた。「今の日本も経験しているような人口減少の危機を乗り切るため、安心して暮らせる福祉国家を目指した」

今こそ福祉先進国だが「曾祖母の世代まで老人ホームは社会から隠され、全員寝たきりの集団部屋でプライベートはなかった」。その後、ノーマライゼーション（正常化）の考えが生まれ、地域の中で一人一人の尊厳を守るケアに変わった。「今があるのは改革をやめなかったから」と強調する。

多くの人と出会い、「スウェーデンと日本のためになる活動」と選んだ福祉の道。二十数年前に比べ、日本でも個別ケアが浸透してきたと感じている。

初来日ときのホームステイ先は、山梨県出身の剣道有段者の家庭。「富士山や武田信玄のお墓にも連れていってもらいましたよ」と青い目を細めた。

〈桑原久美子〉